

虐殺皇女ヘルエスタとかわいい椎名さん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【Project Winter】にじさんじプロジェクトウィンター！裏切り者を探せ！【人狼×雪山サバイバル】の、一戦目のリゼ皇女のカッコよさにシビれ、その後の一人の椎名さんにとつともなくキユンときたので、今まで読み専でしたが、我慢できずに書いてしまいました！

※独自解釈在り

pixivにも投稿しています
にじさんじssもつとはやれ〜

目次

虐殺皇女ヘルエスタとかわいい椎名さん

虐殺皇女ヘルエスタとかわいい椎名さん

みんなで力を合わせたら必ず帰れる。そう、にじさんじのみんなでなら、必ず。

そんな感じで自分を勇気づけながら、リゼとあたしと笹木でちよつと遠くまで部品を探しに来た。もう発電機は直ったから燃料以外がたくさんあったらいいな。そんなことを考えながら笹木と話す。

「あでも燃料とかばつかりだね」

「燃料いらんやんね」

「もういらんよな」

えっと、なにがいるんだっけ？まあ、笹木の反応からここには大したものはないだろうと考えて、次の場所に行こうと入り口まで戻ったところで、笹木の声が聞こえて振り返った。その時

「あっ青のトランシーバー」

ダアン！

背中に強い衝撃を受けた

「え？……誰……？」

痛い！衝撃が体の奥まで響いて頭がくらくらする。でもそれ以上に信じられない気持ちのほうが強い……！

笹木は本当に気づいていないのか、それとも気づきたくないのか。

あたしのうしろにいるのは

「リゼしか……」

ダアン！

二発目の発砲音——トレイターは

「リゼだ！」

とにかく、早く、逃げなきゃ——

「やばい、もう二人で出て、もういこう!?ボコボコにする!？」

銃を持っている相手に、素手で立ち向かえるわけがない。そんなことはわかっていても、強気な言葉を使っていないと心が折れてしまいうので。

ダアン！

「逃げる!？」

あたしの言葉が合図になったのか、笹木が唯一の出口から飛び出す。それについていこうとして

ダアン!

銃声がして、前を走る笹木の体から血潮がしぶくのが見えた

「逃げる逃げるにげてにげてにげてにげて!」

叫ぶ

笹木が逃げる方向を変えたことでこちらに銃を構えて笑みを浮かべるリゼが見えるようになった。笑顔はいつものリゼと変わらないように見えた。でもそれがこちらを殺そうとしている行動とあまりにも合っていないくて、それが無性に怖い。

あたしの中の感情的な部分が、トレイターがリゼではない可能性を訴えていたけど、これで逃れようのない現実になってしまった。

「別々に逃げて言おう!みんなに!」

放たれ続ける銃弾から逃がれるのに必死でもう笹木に聞こえていくかすらわからないけど、叫ぶ。

散弾が体のすぐそばを抜けていくのに冷や汗が出る。

直撃はしていないけど、何発か当たってしまった。あと一発でも体のどこかに受けたら動けなくなる!

やばいやばい「やば——」

「にがした」

全身に冷水を浴びせられた。そんなはずなのに、本気でそう思った。

長いこと雪山にいるからもう寒さにはなれたと思っていた。けど、それでも心までは冷えていなかったんだと今気づいた。

背後から聞こえてきたリゼの声は、今まであたしを先輩と慕ってくれていたかわいい後輩から放たれるなんて想像もできないほどに無機質で冷え切っていて。

あたしは、お茶目なギャグで場を和ませるかわいい皇女様とはもう

二度と会えないんだと気づいてしまった。

「笹木さんなら追えるか……」

いつもの朗らかな笑いとは真逆の、嗜虐的な笑いを含んだ声が聞こえる。

静寂

銃声

「えへへやったあく楽しかったぜ先輩との友……」

遠くなるリゼの言葉を聞きながら走る。

笹木は、笹木は、笹木は。笹木は——

「死んだ……誰かあ、だれか……」

助けて

「笹木がやられ、ああ……クマだ……！嫌だ」

ダメだ、こんなところでクマに殺されるわけにはいかない！

だって、みんなに伝えなきゃ！リゼが、リゼがトレイターだったって……

「みんなどこ……」

行きは賑やかで、こんな雪山なんてみんなで力を合わせればすぐに脱出できるなんて思ってたのに

「みんな」

一人がこんなに寂しくて

「みんなどこお……」

こんなに怖いものだったなんて

「はっ はっ」

自分の吐息だけが響いては、真っ白な雪に吸い込まれていく。

「家に帰れない」

無意識に口を出してしまった言葉にとっても怖くなる。考えちゃダメだ。そんなとき

——えつと

声が聞こえた。この、優しくて温かい声は。アンジユ！

「アンジユ！アンジユ！」会いたかった

そう続けようとした声は、アンジユに届いていないことに気づいて止まった。

小屋の近くで雪に埋もれるように倒れるアンジユの遺体が視界に入ってハッとする。

そうだ。アンジユの声が聞こえるはずがない。だってアンジユは。

もう死んでたんだ。

やっと見つけた拠点の山小屋で、少し前に起こったことが一瞬で脳内を駆け巡った。

アンジユは最初の被害者だった。毒に侵されて死んだんだってかなかなか言ってた。

その時はまだ小屋にあったトレイターと呼ばれる化け物について書かれた古い手帳を見つけていなかったから、仲間の皮をはいで成り代わってしまう恐ろしい化け物がこの山に潜んでいるなんて思いもしていなかった。吹雪がやんだらすぐに帰れると思ってた。それなのに……

ある時アンジユの様子がおかしくなった。落ちてたベリーを食べたからだという。みんなは落ちてるものなんか食べるからあたってんだ！なんて笑ってたけど、アンジユは毒が入っていると断定していた。今思えば、錬金術師だからそういうのには詳しくあったのかもしれない。心配だったけど元気そうにみえたし、食料も薪も必要だから、みんなで取りに行く間小屋で安静にしてもらってた。そしたら、まるでつながってた糸がいきなり切れたみたいにプツリと意識を失って、二度と目覚めなかった。

もつとアンジユの話聞いてたら……と、今となっては意味のないことを思う。

その時のリゼの反応に違和感を覚えたのは、あの時すでにトレイターがリゼに成り代わっていたということなのか、そうでないのか。

もう考えたってわからない。

ということとは、この聞こえているアンジュの声は、あたしの幻聴……？雪山で遭難した時、あまりにも強いストレスで幻聴が聞こえるという話を聞いたことがある。そう考えたところで、てんかいじがどうとか畳がどうかあたしにはよく分からないことを話しているのに気づく。そうだ。死んだアンジュの声が聴けるはずがない。アンジュ……もう一度会いたいよ。

「みんなに会いたい。ねえみんなどこ……？」

アンジュの遺体を横目に誰もいなくなった小屋を離れて当てもなくみんなを探す。

しばらく歩いたけど、自分の足音が響くだけで、みんなの姿は影も形もない。

体だけで、心の大事な部分が温まることはないとは知りながら、焚火の準備をする。

「……であつたまつて来るの待つ……」

何かしてないと、静寂と不安に押しつぶされそうだった。

『……るって言った……』

「あつ葛葉……えっ？」

いきなり懐のトランシーバーが話し出した。葛葉の声っぽい！ボタンを押してこちらも話しかける。

「ねえ！」

「今葛葉の声した気がする！」

思わず独り言が漏れてしまう。でも今は誰かの気配がするだけでこんなにうれしい！

って熱い！声が聞こえたことに集中していたせいで、足が焚火に振れていることに気づかなかった。急いで歩きまわって雪で冷やす。

雪の冷たさでちよつと冷静になって考える余裕が出たとたんにハツとする。そういえば、手帳には 트레이ターにはお互いに意思を疎通する手段があるって書いていた。それがこのトランシーバーのことを指しているとすれば……トレーターは

「リゼと葛葉じゃん」

早く

「ねえみんなどこいったの」

早くみんなを見つけてこのことを——そんな風に考えていたところで耳に届くかすかな声

「…ほら……」

もしかして！

「てんかいじーどこー！ねえてんかいじどこ!?かなかなどこ!?」

あたしの声が届いたのだろう。だんだんはつきり聞こえだすてんかいじの笑い声が今は何より頼もしい。

「かなかなどこ!?」

「うえうえうえー！多分上ー！」

そんなかなかなの声が聞こえるほうへ走りよりながら、あたしは言葉にできないくらい自分が安心しているのに気づいた。